

[論文]

日本語母語話者に対する韓国語の アクセントの効果的な教育について

朴 南 圭
田島ますみ

- <目次>
1. はじめに
 2. テキストと発音, 抑揚について
 - 2.1 韓国語の教材開発
 - 2.2 中央学院大学で使用しているテキストについて
 3. 話せる言語としての韓国語の授業のために
 - 3.1 場面設定から単文の繰り返しによる練習重視による授業
 - 3.2 自習環境と学習意欲を高める仕組みとしてのSEの活用
 - 3.3 SEの使用を前提としたシラバスの設計
 4. 終わりに

1. はじめに

大学の教養課程における韓国語教育とその問題点については朴・田島(2013b)で述べた。現状を踏まえて本稿では、大学の韓国語教育を発音とアクセントを中心にした効率的で実践的なものにするための方法についてより具体的に考える。

現在、日本で韓国語を教養科目として設置している大学では、授業用に様々なテキストが使用されている。それらすべてをここに網羅することはできないが、一般的なテキストとして、中央学院大学の法学部で2012年度コリア語教科書として採用した、『ことばの架け橋』と商学部で2013年度採用されている『できる韓国語 初級』の発音の記述を分析し、話すことを中心に考えた場合の韓国語教育の方向性を本稿で模索したい。

具体的には、上記二冊の教科書本文の内容から、文法事項を除いた発音に関する記述を中心に比較検討し、大学の教養課程における韓国語教育を実践的で「話せる」ことを目的にするための方向性を提示する。

韓国語は、初級段階での正しい発音の習得が中級以降において重要である。それぞれの単語レベルもさることながら文になった時のアクセントにおいて中級学習者にみられる発音、抑揚のくせは、容易に修正されるものではないので、初級の正しい発音教育は学習を進めていく上でたいへん重要である。

2. テキストと発音、抑揚について

2.1 韓国語の教材開発

韓国で韓国語教材の研究が始まったのは1970年代に入ってからであり、本格的な教材の開発は1980年代中盤以降⁽²⁾である。

1980年代以降出版されたテキストは、主に大学付設の語学研究所のテキストで、授業を前提としたものであった。構成は、文法のレベルの段階に従って、日常生活の場面の主要フレーズを配するというものである。学習者が主に大学での語学研修を受けているという状況で想定した、大学、食堂、市場、デパート、病院、空港など、日常生活で遭遇しうる場面において本文の会話を示し、その中で必要な文法項目を学習して、本文の会話を暗記させるという構成である。⁽³⁾

ソウルオリンピック以降は韓国語学習者の増加に伴い、教材が増えた。1990年代後半以降の韓国語教材は、課題中心、機能統合型教材が開発されるようになり、この時期以前の教科書と多くの違いがある。しかし、近年になるまで発音、アクセントを積極的にテキストに取り入れたものは見あたらない。

現在は社会的な要求もあり、大学の附属語学研究施設の増加、民間の語学教室の増加に伴い、毎年多くの教材が出版されており、なかには発音を扱った参考書も増えている。しかしながら、国語辞典の編纂が国家事業として2001年に開始されたという事実を併せて考えても、韓国の自国語研究と自国語を対象化した他者からの視線の教材の開発は、最近になって本格化したと言っても過言ではない。⁽⁴⁾

日本での韓国語教材の開発も活性化した当初のきっかけは、ソウルオリンピックであり、時期としてもその前後になる。ソウル五輪からほぼ20年後のブームによる学習者の増加に伴い教科書の出版もそれまでに比べ大幅に増えた。韓国語学習教材を目的によって大きく分けると、大学等の教育機関のテキスト（学期単位や通年の授業で使うことを想定して作られている）、民間の語学学校等で使うために作られたもの、独習用の参考書、特定分野別文例集などがある。

2.2 中央学院大学で使用しているテキストについて

中央学院大学の法学部では、コリア語のテキストとして2011年度から2年

間『ことばの架け橋』（生越・曹，白帝社，2012改訂版）を使用した。当該テキストは，21課構成で，1課から3課までがユニット1，4課から11課までがユニット2，12課から21課までがユニット3の三部構成になっている。

発音の記述は，ユニット1で単語を中心として以下のように説明されている。

第1課 文字と発音（1）母音（1）子音（1）

第2課 文字と発音（2）母音（2）子音（2）

第3課 文字と発音（3）終声，連音化

ユニット2以降は学習に必要な文法内容と場面設定の会話で構成されている。文の中での発音について練習を設けることはしていないが，本文の例示の下の部分に，正しく読むために注意する発音という項を設けている。たとえば，

좋아하세요 → 조아하세요

없으세요 → 엮쓰세요⁽⁵⁾

팬찮아요 → 팬차나요

のように正字法に合うように書かれた本文を，発音通りに読むために書き換えている。さらに発音が変化している部分を色分けし表記している。本文の文法の説明の項では，それぞれの課で発音の法則を振り分けて説明している以外，欄外にも「連音化に注意」など発音の法則別に表記されている。

商学部で採用されているテキストは、『できる韓国語 初級I』であり，全体が20課+レッスン4の構成になっている。構成は全体をPart IからPart IIIまでの三部構成にし，Part Iのレッスン1～4とPart IIの第1課～第20課，Part IIIのまとめになっている。

発音については，Part Iで以下のように扱っている。

Lesson 1 基本母音

Lesson 2 子音, 激音, 濃音

Lesson 3 パッチム

Lesson 4 合成母音

また, Part III のまとめの中にも発音の法則の項目を設けている。

Part II では, 語彙説明の後に, 〈発音を練習してみましょう〉という項を設け, たとえば以下のように連音化が説明されている。

〈発音を練習してみましょう〉

다섯이예요→(実際の発音) 다섯시에요

: 連音化 (P173参照) によってパッチム「ㅅ」の次の「ㅇ」に移動される。

읽어 보여요→(実際の発音) 절머 보여요:

: 二重パッチム (P181参照) の後「ㅇ」がくると, 二重パッチムの後ろの子音が連音化される。⁽⁶⁾

両テキストとも付録として CD が添付されており, 本文の文章の発音を CD で聞くことができる。しかし, 注意する発音についての記述は, 本文全体の分量と比べて少ない。また, 両テキストともにアクセントについての記述はまったくなされていない。さらに両方のテキストで言えることは, 完全な文を扱い, 日常生活に必要な動詞, 形容詞等の用言の選別があまりなされていないことである。

だが, 日常会話, 特に対面の対話の場合に文法的に正しい完結した文が使われる割合は非常に低い。加えて, 生活場面に即した構成であるので, 特定の場面以外に使う用途が限定される名詞の学習のために多くの時間が費やされることになり, 学習意欲を削ぐ原因にもなっている。

3. 話せる言語としての韓国語の授業のために

以上、現在のテキストを見てきたことから言えることは、アクセントの記述、日常生活で使われる用言の選択、実際に使う活用形の練習が絶対的に不足していることである。

では、どのようにすれば韓国語教育をより実用的なものにできるだろうか。筆者の一人は中央学院大学法学部のコリア語の授業で、2012年度より Speak Everywhere というウェブツールを活用している。2013年度も継続して活用しているが、今回は調査実験として、2012年度の法学部1年次配当の「コリア語Ⅰ」の受講生21人に対し⁽⁷⁾SE使用について四つの選択肢を設けた上で、その結果を見てみた。受講生が文字を読めるようになった段階で、以下の選択肢を提示した。

- ①事前に発音を例示しない（SEを全く使用しない）
- ②一度練習し、リピートさせる（SEは使用しないが授業で音読する）
- ③SEで週に一回授業外の課題を出す（時間は自由）
- ④SEで週に二回の課題を出す（各授業にSEの課題を出す）

受講生は、それぞれ四つの選択肢の中から一つを選択し、一週間後の次の時間に、サンプル問題のテストを出され解答する、という手順でデータを得た。サンプル問題は、単語が10、助詞をつけた文節が10、完全な文章が5である。以下が四つの選択肢それぞれの正解率を平均したものである。

表1 SE使用・不使用によるサンプル問題正解率の違い⁽⁸⁾

グループ	①	②	③	④
人数	11人	10人	10人	11人
正解率	21%	25%	64%	59%

以上の結果からすると、①、②のケースは同じように正解率が低い。それ

に対して③の場合がもっとも正解率が高かった。それは、多くの場合、直前に SE の課題を提出し（当日の朝など）、正解を覚えていたことによるものであると考えられるが、一週間に一回だけの自主的な努力であっても成果があるということを示唆している。④の場合は、課題提出がサンプル問題のテストの直前にならないために時間の経過によって正解率は下がることを示しているが、回数を増やすことで反復学習が習慣化されれば改善が期待できる部分である。

語学学習において復習は、音を記憶するために大変重要で欠かせないものであり、その音の部分を定期的に自分の声で録音できる SE のシステムは有効であることが分かる。

3.1 場面設定から単文の繰り返しによる練習重視の授業

この調査実験からさらに得られたことは、単語レベルでは比較的習得しやすい語の抑揚であっても、文になるとなかなか覚えられないということである。この傾向は学習時間が長い場合でも変わらない。

そのため、多くのテキストで使われる場面中心の会話の練習は、本文内に十分な練習問題がなく、授業内で限られた発話時間しか持つことができない現状の大学教養科目の韓国語の学習においてはコミュニケーションという面から考えると有効とはいえない。多くの場合自主的な学習をサポートする副教材が CD しかない状況で、CD に頼る学習には限界があり、単調であって関連性の薄いフレーズの繰り返しは学習者の意欲を削ぐことになりかねない。

書かれたテキストと限られた発話時間を補う意味としての SE の意義は大きい。発話時間を補うためには必要に応じたスポット問題として SE を活用するのではなく、通年単位で SE による練習を組み込んだプログラムを作成することが必要である。

3.2 自習環境と学習意欲を高める仕組みとしてのSEの活用

制約の多い大学の授業で効果的な教育を考えるには、まず学習者の学習意欲を高めることが最優先されるべきである。それは、韓国語学習の動機づけを高める仕組みをいかに取り入れるかである。

自習環境をSEで提供し、定期的に学習していくこと、SEの内容も単純な音声のリポートに限らず、パネル学習、フラッシュカードなどを用いた記憶力を高める要素を取り入れ、それらの問題を解いていくことで発音と発話に自信をつけ、さらに通じる発音で発話ができるというバーチャルな体験をすることが、学習の動機づけを高めると考えられる。

3.3 SEの使用を前提としたシラバスの設計

以上のことを念頭において、通年授業にSEを組み込んだプログラムを設計する必要がある。具体例には、発音の練習を最初に実施するが、それには多くの時間を配分せず、単文を繰り返し練習していく。単文に使われる単語は韓国の日常生活で使われる頻度の調査から等級分けされている部分⁽⁹⁾を使用し、それらを練習するうちに語彙と用法、発音が自然に感覚的に身につくことを狙う。

以下は2012年度実施したSEの実績をふまえて、新たなシラバスとして通年授業を念頭に作成してみた既存の特定教科書の使用は前提としないシラバスである。

表2は前期のシラバスで、まず、文字の読みとともに、最低限必要な自分の意志を表現できるようにすることに重点を置く。

表3が後期のシラバスで、時制の練習を通じて表現を多様にすることに重点を置いている。さらに、単語の学習はもとよりそれぞれのアクセントの変化に柔軟に対応できるように各レッスンごとにSEによる練習を週に1～2回設けることにしている。詳しい内容とSEの練習については稿を改めて述べる。

表 2 : 「韓国語 I」前期のシラバス案

Section0 : 文字の学習
L1 文字の学習
Section1 : 現在の行動や気持ちを表現しよう
L2 ~아요
L3 ~어요
L4 ~해요
Section2 : 依頼する
L5 ~아 주세요
L6 ~어 주세요
Section3 : 否定・不可能表現を練習する
L7 안~ 否定
L8 ~지 않아요 否定
L9 못~ 不可能
L10 ~ㄴ 수 있어요 可能
L11 ~ㄴ 수 없어요 不可能
L12 ~지 말아요 禁止
L13 ~고 싶어요 希望

4. 終わりに

大学の教養課程における韓国語の教育は、韓国の歴史や文化を理解させることで所期の目標を達成したともいえるが、語学としての到達水準があまりにも低いのも現実である。

多くの大学では、週1コマで1年~2年程度の時間数しかなく、授業内で習得できる範囲は限られるからである。さらに試験のためにテキスト中心に

表3：「コリア語Ⅰ」後期のシラバス案

Section4：現在進行について表現しよう
L14 ～고 있어요
L15 ～는 動詞現在連体形
L16 ～ㄴ/은 形容詞現在連体形
Section5：過去形について表現する
L17 ～았어요
L18 ～었어요
L19 ～했어요
Section6：未来について表現しよう
L20 ～ㄹ 未来連体形
L21 ～겠어요
L22 ～을 것 같아요
Section7：假定表現を練習する
L23 ～면假定아도, 어도
L24 ～으려고 해요
L25 ～기 전에

ならざるを得ず，結果個人の努力がなければ単位を取っても，会話のレベルは，日常会話のレベルに達しないことが多い。

通年の30コマの授業時間をどのように拡張してより実践的な語学の授業を行うことができるかが課題である。調査実験の結果を踏まえ有効なシラバスが作成できれば，SEを通じた個人練習を加えることによって日常会話に不自由しない会話力を身につけることは到達できる目標であると考えている。そこを目指して，SEの活用とシラバスを検討していく予定である。

〔注〕

- (1) 長谷川 (2000) における実験の結果, 中級以上の学習者にも初級と同じアクセントの傾向がみられる。
- (2) この時期はソウルオリンピックの開催が決定し, 韓国語を世界に向けてアピールする機会としてとらえられ, 政府も積極的な支援を行った。しかし, 多くの教材は, 韓国国内で行われる国語の教科書を英訳した水準であり, 外国語としての韓国語をとらえているテキストは少ない。
- (3) 多くの教材のパターンは, 文型だけ提示され文法説明がない。教材の最後に付録という形態で文法内容を記述し, 文型提示→文型説明→例文の形式をとる。記述言語は主に英語である。
- (4) 海外に韓国語を広めるという目的とともに, 韓国国内に増加する中国出身の韓国人や就業のために来韓する外国人が年々増加しており, 多言語社会として韓国語の教育は緊急の課題となっている。その場合の韓国語教育はより現実に即した効果的な教育方法が必要である。多くの場合, このような教育方法は効果的であるが, 学習対象者が韓国在住という点で, 学習時間面, 内容に関して, 海外で韓国語を学習する学習者とは違いが出てくる。韓国国内の教育機関で使われる教材をそのまま海外で使うことはできない。
- (5) 『ことばの架け橋』 p. 84.
- (6) 『できる韓国語 初級 I』 p. 111.
- (7) Speak Everywhere は以後 SE と略称する。
- (8) それぞれ時期と問題を別にし①と④, ②と③は同一グループである。
- (9) 김광혜 (2008).

〔参考文献〕

- 李志暎 (2007) 『できる韓国語 初級 1』, DEKIRU 出版。
- 庵功雄他 (2002) 『日本語文法ハンドブック』, スリーエーネットワーク。
- 池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」, 『日本語教育』 152号, pp. 46-60.
- 市吉則浩 (2007) 『韓国語リスニングトレーニング』, DHC.
- 生越直樹・曹喜澈 (2012) 『ことばの架け橋』改訂版, 白帝社。
- 鹿島央 (2002) 『基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク。
- 河野俊之他 (2004) 『1日10分の発音練習』くろしお出版。
- 韓国・国立国語院 (2012) 『標準 韓国語文法辞典』, アルク。
- 鄭明石・鄭喜盛 (1982) 『現代韓国語 基本文型と構造』高麗書林。
- 長渡陽一 (2009) 『韓国語の発音と抑揚トレーニング』アルク。
- 長谷川由起子 (2000) 「日本語を母語とする学習者の韓国語の抑揚について」,

- 『九州産業大学国際文化学部紀要』10号, pp. 19-38.
- 朴南圭・田島ますみ (2013a) 「外国語教育における Speak Everywhere の有効性について—韓国語の文字と発音のずれを中心に」『中央学院大学人間・自然論叢』35号, pp. 47-59.
- 朴南圭・田島ますみ (2013b) 「コミュニケーション能力向上のための韓国語教育」『中央学院大学人間・自然論叢』36号, pp. 15-30.
- 前田真彦 (2013) 『韓国語発音クリニック』, 白水社.
- KBS 韓国語研究会編著 (2013) 『改訂版 KBS の韓国語標準発音と朗読』, HANA.
- 국립국어원 (2013) 『한국어 문법 2』 커뮤니케이션북스.
- 김광해 (2008) 『등급별 국어교육용 어휘』, 도서출판박이정.
- 서울대학교언어교육원 (2009) 『한국어발음47』 1, 2 랭기지플러스.
- 연세대학교출판부 (1995) 『한국어 발음』, 연세대학교출판부.
- 연세대학교한국어학당편 (2001) 『처음 배우는 한국어 읽기』, 연세대학교출판부.
- 박봉자 (1999) 『한국어문법사전』, 연세대학교출판부.
- 한국어문화연수부편 (2002) 『표준 한국어 발음 연습 2』, 고려대학교민족문화연구소.